

藤田(恵)・成瀬論文をめぐる藤田(広)－成瀬論争へのコメント

佐伯 胖 (東京理科大学理工学部)

藤田(恵)・成瀬両氏の論文¹⁾、藤田(広)氏のコメント²⁾、さらに成瀬氏の反論³⁾を通読してみると、問題となっている論点が微妙にいくちがい一種の「すれちがい」をおこしているように見うけられる。

藤田(恵)・成瀬論文のおもな研究内容は、テスト項目に対し、通常の「正誤」判定に加えて、「自信の有無」のデータを収集しそれらと「反応時間」との関連を統計的に分析したものである。

藤田広一氏の批判のおもな論点は、成瀬氏らの研究の内容自体については一応の評価をしつつも、むしろ、著者たちの研究態度、論文の構成、などにおいて、「教育工学的でない」とされたわけである。ただ、ここで少しわからなくなりはじめたのは、藤田氏の批判が、研究者の personal な問題(文章スタイル、論議の進め方)と内容そのものについての問題が渾然としはじめ、それがさらに、一般的な「教育工学的態度」とはいかなるものか、さらにつけ加えて「教育工学とは何か」などが「私見」というような形でふれられておられることである。

成瀬氏の反論では、むしろ、この後者の問題が「教育工学とは何か」という一般論としてとりあげられ、そこには純粋な「工学」ばかりでなく基礎的「科学」もふくめるべきであり、また、理学的志向をもつ研究者も「教育工学者」にふくめるべきである、とされている。

問題を整理すると次のようにまとめられよう、

- (1) 藤田(恵)・成瀬論文は「教育工学的」内容を有するか。
- (2) 藤田(恵)・成瀬論文のスタイル、構成は、『日本教育工学雑誌』にふさわしいものか。
- (3) 藤田(恵)・成瀬両氏は、「教育工学者」としてふさわしい研究態度を有するか。

これらのいずれかについて「否」という答が出された場合に、次のような「一般論」が提起される。

- (1') 「教育工学的」内容とは、いかなる研究内容か。
- (2') 本誌の要求する論文のスタイル、構成はいかなるものか。

るものか。

- (3') 「教育工学者」とはいかなる人々で、いかなる「研究態度」を有する人々か。

さて、藤田(恵)・成瀬論文が「教育工学的」内容を有するか、といわれれば、疑いもなく「大いにある」と答えるべきであろう。ただし、それは「一見したところ」では明らかではない。しかし、テスト項目に対して、自信の度合いや反応時間を測定し、正誤反応との関連等について統計的解析を行なうことは、たとえば CAI 研究には不可欠ともいえるべき重要な研究である。古くは PLATO などの CAI システムにみられる通り、学習者の「自信」に応じたフィードバックやブランチングを行なったり、フレームごとの反応時間をもとにしてフィード・バックの形式を変えることはすでに多く試みられてきている。その場合、学習者の反応時間や自信の程度だけをたよりに何らかのアクションを対応づけたときに生じうる「危険率」を算出したり予測したりするために、藤田(恵)・成瀬論文の結果のみならず、分析に用いられた統計的モデル、解析方法は大いに役立ちうるものである。CAI への利用は単なる一例にすぎず、レスポンス・アナライザーを用いて授業を進めるときの教師のアクション選択にも利用できよう。

ただ、上記のような「意義」が「一見したところ明らかでない」ことに問題はある。つまり、「教育工学」の専門誌としてふさわしい論文形成とはいいい難く、むしろ「心理学研究」などにふさわしいスタイルになっている点で、藤田広一氏の批判は当を得ている。とくに、「緒言」での問題提起や研究の動機づけ、さらに、「考察と結論」における意味づけにおいて、もう少し、「現実の教育をいかによくするか」という点での議論をふくめるべきではなかったか。これは本誌が他の専門誌と異なる独自の方針として、著者たちに要求してもさしつかえないことであろう。

さて、最後の、「教育工学者とはいかなる人々か」については、成瀬氏の意見に反対する人はいないであろう。どのような人であっても、どのような「背景」をもった人でも、また、どのような「研究態度」をもった人でも、「教育をいかにしてよりよくするか」に関心をい

¹⁾ 日本教育工学雑誌 Vol. 1, No. 1, pp. 27-36

²⁾ 日本教育工学雑誌 Vol. 1, No. 1, p. 37

³⁾ 日本教育工学雑誌 Vol. 1, No. 2, p. 101

だき、しかも、その場合に“実証的”アプローチ（抽象論でなく、現実データないしは測定可能な命題をもとにして厳密に論理を組み立てるアプローチ）をする人々は、すべて、例外なく、「教育工学者」にふくまれるべ

きであろう。なかには「現場ベッタリの人」、「実験室ベッタリの人」、「机上の理論家」すらふくまれても相互の討論の可能性があるかぎりやむをえないとさえ言えよう。